B 85

神子降生

（インカルチーション）

252
424

特43
230

序

バウン教授の神子降生に關する說敎は、論旨完美にして、大に有益なるを覺ゆ。故に余は進んで之を日本語に飜譯せしめ、方今宗敎問題に就て深く考慮しつゝある此國の多くの同志に紹介せんと欲す。微意を諒せらるれば幸甚。

明治三十九年四月

東北學院長　デー、ビー、シュ子ーダー

明治
39 8 9
内交

神子降生（インカルネーション）

博士　ピー、ピー、バウン

『爾曹我儕の主イエスキリストの恩惠を知る、彼は富る者なりしが爾曹のために貧き者となれり、是なんぢらが彼の窮乏に由て富る者とならん爲なり』

（哥林多後書八章九節）

使徒パウロが此教理を述べたるは、ユダヤの窮乏信者のためにコリントの教會に義捐金を訴へし時、偶然にも之を言ひあらはしたるなりき。使徒パウロは初に先づマケドニャの諸教會の憐恤の心寛きことに就きて書きしるせしが、人の感情を害うまじとの細やかなる情と、人の自由といふことを重んずるとよりして、彼はコリントの信者の賜物に對

して別に規則の如きものを定むるとは爲ざりしなり。コリントの兄弟儕は己れ自ら其なすところを決せざるべからざりしなり。さはれパウロは彼等をして自ら其處決を爲すに當り、彼等に對する主イエスキリストの恩惠と其の神の犠牲とを覺えしめんことを欲したるなり。古今いづれを問はず、基督信徒に對しては是以上の訴求はあらざるべし。主の名に於てする凡の義捐には十分なる規則なり又理由なり。されど我儕の茲に問題とするところは義捐のことにあらずして、以上の事實よりして偶然にも示されし教理に就いてなりとす。

此教理は敢て事新しき說として呈顯されしにあらず、『爾曹我儕の主イエスキリストの恩惠を知る云々』とあるが如く、誰にも既に了解せられたるものと假定して述べられしとは、凡の人の注意する所ならん。我儕の主はその降生前已に存在したまへるなり。彼は富る者にして、父と子の間に存する奥妙言ふべからざる交誼を豊かにし、世界の存在以前よりして豊かに父と共に光榮を有ちたまひしなり。パウロが他の章にて言ひあらはせし如く、我儕の主は元來神の形にて在したれど、其の神と等しきことを棄てがたきことゝ思はず、却つて自らを虚しうして僕の貌を取り、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受け給ふに至りしなり。しかも是みな我儕のためになされしなり。我儕のために、主は貧しき者となり、父と偕にありし所の榮を棄て、人間の分限に服ひたまへり。すべて皆この無限の愛と犠牲とによりて、我儕が神の許に上げらるゝことを得んがためなるなり。苟くもパウロの資格を認むる人は、誰ありて、此章句を讀みて、我儕の主の存在がベテレヘムの馬槽にはじまりしと想像し得るものはあらざるべし。

余の考へんと欲する教理は、神の示現のため、及び人類の祝福のため

に、神の子が肉體を取りて此世に降り給へるといふことなり。

先づ第一に、神の子が肉體を取ることは如何なる意義を有するかに就て一言すべし。我儕は往々この教理を想像上より解釋して、我儕の主が恰も人間の形の限られたる中に特にとぢこめられたるものゝ如く考ふるやう誘はるゝとあり。然る時は、彼は如何にして斯く限られ定めらるゝものなるかといふ難問直ちに起り來り、之に對して、皮相的思想を以て、早計にも斯の如き教理は不合理にして事實有り得べからざることゝ結論するに至るべきは勿論なりとす。是れ斯る問題に對して判斷力を有せざる想像に、誤りたる要求をなすよりして生ずるなり。吾人は自己を容るゝ爲の體なるものありて其中に在にあらず。體中にあるといふことは、たゞ僅に物質的條件によれる一種の經驗を有する意味に過ぎず。此世の中に存在すといふことは、單に或る形と法則とを具へたる一種の經驗を有する意味なり。此世を脱するといふことは單に或種の經驗及び其分限よりして他の夫に移る意味なるべし。故に一般に人間たることは、單に或る分限法則の下に存在すといふ意味なり。而して若し或る何者かゞ人生の條件法則及び制限に服ひしとすれば、其者は其事實だけにて、明瞭なる意味に於て人間となるならん。此故に我儕の主が肉體を取りしといふことは、主が人生の條件法則及び制限に從ひ、最も眞なる意味に於て人となれることゝなるなり。主は此意味に於て我儕の生涯を送り給へるなり。少くも其意味だけは明瞭にして、之にて充分なるべく思ふなり。若し我儕がこれ以上のことを言はんとする時は、徒らに小六かしき空論に陷りて自己を喪失し了るに至らんのみ。

若もいま如何にして此限界が成立すべきかといふ問題起れりとせ

んに之れに對する答は、知らずと言ふことならざるべからず。恰も我儕が如何にして夫が不可能なるかを毫も知らざると同樣ならん。科學的及び哲學的考察の進歩は、根本的存在の問題をして層一層不可解ならしめ、我儕の思想の有限相對なることを說示するにより、考深き人々をして實驗を離れて何が可能又は不可能なるかを斷言するに層一層持重ならしむるに至れり。神學研究の結果は、神の絕對的存在は我儕に取りて曉り易からざる奧妙の秘義なれども、夫と同時に我儕が神を父、子、聖靈として考ふることは、最も眞理に近づき得るといふことなり。これ即ち三位一體の敎理にして疑もなく不可思議なる敎理にはあれど、聖書の上より見るも或は哲學上の見地より考ふるも、最も困難尠きものなりとす。如何なる問題にしても、之を一貫して考へんとするに當り、大なる困難に遭遇せざるは殆ど稀なり。神といふ一個の存在者のうちに三個の有意者が變り存するといふ考へは、此點に於て、道德性生活に必要なる永遠の交りを有せざる單獨孤寂の思念に比して、敢て惡しきことあらず。更にまた基督學の研究の結果は、イエスは單にマリアの子たりしのみならず、また神の子にして我儕を神の許に擧げんがため、人間の運命の法則制限を身に受けて人となりしといふことなり。これ神子降生の敎理にして、之を成立せしむるがために三位一體の敎理をも要するなり。

此敎理の意義及び哲學に關しては、以上述べたるだけに止め、これより歩を轉じて其の宗敎上及び實際上の重要なる意義に就て考ふることとせん。如何となれば此敎理は多くの人が想像せる如く、甚しく論理を侮辱せる說にてもなく、また神學の無益なる好事的空論にもあらずして、寧ろ人を救はんとする神の力たり、基督敎の中心的眞理たるがた

めなればなり。勿論說敎の範圍に於ては、たゞ暗示と忠告とを供するに過ぎざるのみ。

第一に神の子が肉體を取りて此世に降るといふことは神の最高の示現を含めり。我儕は自分が何も知らざる世界に於て如何なるものが成立し得べきかを思料する必要あらず、されど我が人間界に於ては、神自らの最高の示現は、其子の肉を受けて人と為れることによりて作さるゝなり。神の力と智慧の示現は十分單純なるものなり。神の善なることも亦た、自然界の恩惠ある有樣に於ても表はされ得べしと雖も、最高の示現、道德上の愛の最大示現は、すべて此等のものよりも遙か以上にありて全然別種の示現たらざるべからざるなり。神學は神の聖なることに就て言へるところ多しと雖も、そは主に消極的にして抽象的の事に屬せり。神は正義の法則を布き且つ之を行ふ所の主宰者として思料され、而して神の聖なることは此等の事に於て盡きたるが如く認められしなり。古き哲學は全く神を道德的のものとして思料すること多し。彼等は神を一の形而上的完全者として考へ、此世の受造物に對して注意し或は思ひ遣るといふが如きことは神の注意に値せざるものとして、非常に念を入れて神より取去らんことに力めたりしなり。神は所謂エピキュリアン式の神たりしなり。

『雪の至微至細なる白片も決して降らぬ所、
雷鳴の最と低き響も決して轟かぬ所、
且つ、人間の歎聲もまた
登りて其の聖き永久の靜安を傷らじ。』

斯る人間の鄙野利己の反映に過ぎざる哲學の思想が、神學に影響し汚濁を與へたり。また、我儕の神學の大部分は人々が君王の神權と不可

侵權とを信じたる時代に書かれたりしを以て、この思念が廣く蔓延して、神は眞の道德的存在者としてよりは寧ろ高大不可侵の君王の如く思料されたるがために、神學上の思想を腐敗せしめたるなり。之と同時に神が其造りし物に對して道德上の責任を有することを主張するが如き考へは、若し褻瀆ならずとするも愚にもつかぬ不合理の說として、聞くだに戰慄さるゝ有樣なりしなり。其の神學上の神は人が之を摸倣せば恥辱なしには止まざりしなり。されど基督敎の思想は、神は存在者中最も深き義務を負ふ者にして、道德の主義は、我儕を束縛する如く同じく神に對しても束縛を與ふるものなることを見るに至りしなり。殊に神を愛なりとして思料せんとすることは、百年以前まで神學の根據たりし、最高絕對の神權の意見を拋棄せしむるに至れり。我儕强者は弱者の重荷を負ふべき筈なりといふことは、何にも應用し得る主義の如く見ゆるなり。愛なる神は愛の働きをせざるべからず、また神が愛なりとせば、全く愛の含むところの凡を有せざるべからず。然らざれば愛は愛ならざる也。

我儕は更に神の子の降生が神の最高示現たることを宣言せんとす。若し神が空間と時間との中に生命を有せざる世界を充たせしならば、そは唯だ力と熟練とをあらはせしに過ぎず。若し愉快を與ふるが如き手段を世界に充たせしならば、そは仁慈をあらはせるものならん。若し神が自らを犧牲とせずして豫言者及び敎法師を我儕に送りしとせば、そは多少謝意を表すべきものならんも、敢て我儕の心を神の方に大に感動せしめざるべし。これ我儕の愛は心勞と苦痛を甞めたる豫言者敎法師等の上に親しく及ぶが故なり。此種のすべての善行に於ては、神は單に其の有り餘るうちよりして之を要する者に施與を振り

蒔くと雖も自らは何の苦難もなき所の富者の如く見ゆるならん。多少の感謝は拂はれ得べきも、しかも此點よりいへば、神は道德的に我儕人類の道德上の偉人物の下位に永くとゞまらざるを得ざるべし。彼等偉人物の賜物は其値に抵れるものなり。彼等は其働に其身と其心とを打込みたるものなり。彼等が事を成せる一に克己の精神に出でたるなれば、夫程の値を有せざる或る施與的德行よりは、限りなく優れるものといふべし。而して我儕が自らを犧牲とせる神を悟るに至るまで即ち神が己を棄て凡て重荷を負ふもの、首凡て己に克つもの、頭と崇めらるゝに至るまでには、なほ一層道德の進歩すべき餘地なかるべからざるなり。神が自らを犧牲となして、はじめて有ん限りの恩寵が成就するなり。これ以外何ものもなきなり。義氣に充ちたる獻身的の神こゝにあらはれて、はじめて神は自らの最高示現をなせるものといふべし。

かくて愛なる神が自らを現すといふことが、神子の降生に由て可能となれり。父は世を愛して其贖罪のために己の子を與へ給へり。子は父を人にあらはし、神に人を和げしむるために、その父と共にありしところの光榮をすてゝ人生の約束を受け、死に至るまで服ひたまへるなり。これ大なる秘義の存する點なりと雖も、しかも之に由て奥妙不可思議なる犧牲よりしてあらはるゝ無限の愛を悟ることを得るなり。その奥妙不可思議なる犧牲とは即ち邪なる罪深き世の救拯のために、無限の値と無限の苦痛とをも厭はさりし愛の働きをいふなり。

今これを別個の點より考へ見んに、茲に何處にか一個の人ありて、此世の不幸痛苦悲哀に接して自ら喜び之を救濟し得らるゝ悲痛苦難の道ありても冷淡に看過して敢て何事をもなさぬと想像したらんには

如何。我儕は斯の如き人に就て如何に考ふべきか。而して更に我儕が此者を想像して最も大なる智慧を有し力を有するものとせば如何、彼の利己は全く一層恐るべきものとなるにあらざるべきか。而して我儕がなほ思考力を伸張して、夫を全能全知の者とまで想像せば、其時は如何にあるべきか。斯の如き者は明かに道德界の一怪物なりと言はざるべからず。道德以外の凡ての事に於て、彼が偉大なれば偉大なるほど、その利己の恐るべき邪惡を勢強くせしむるのみならん。而して人の方に於る獻身的愛の各種の働きは、神の罪を定むる理由となるならん。のみならず、若し我儕が此者を神と呼びしとて夫が何の益かあらん。我儕強き者は弱きものゝ重荷を負ふべき筈にして而も最強の者は最大の負擔者たるべき筈なりとす。道德界に於ては凡ての者の丶中最も大なるものは凡てのものゝ僕たらざるべからざるなり。

此法則には一の除外だもあることなし。神自らと雖もあらざるなり。勿論斯の如きは法律上の義務に關する事にあらずして、たゞ道德的善に關する事なりとす。而して凡て愛の含む所のものを有する愛こそ道德界に於て最高無上の義務と稱すべきなれ。神と人とを論せず、道德的善は要求以外の事をなすものにあらず、たゞ愛のため即ち愛の最高無上の要求に應じて始めて事をなすものなり。最高の義に於て、道德の要求を超ゆる程のものゝあり得べき筈なし、されど神のなすべきことを神らしくなすと言ふが如きことはあり得るなり。

余は或種の議論を知れり即ち此議論によりて世には苦痛悲哀其他種々なる不幸の狀態あるにも拘らず、なほ神の善なる事に對して我儕の信仰を保たんと欲することなり。余は敢て斯る議論を輕蔑せず、機會によりて之を用ゐることありと雖も、畢竟これ等は最上まで登りつめて

も單に緩和的のものに過ぎずして、未だ大なる深き問題に觸接せざるとは余の常に感ずる所なりとす。奥底にまでも達すべき議論は唯一つあり、即ちパウロの問なり。『己の子を惜まずして我儕凡てのもののために之を付せるものは、豈彼に併て萬物をも我儕に賜はざらんや』我儕は此世の種々の不幸を見たり。我儕パウロの言を籍りて萬の受造物は今に至るまで共に歎き共に勞苦ことあるを聞くなり。我儕は少數の善人が生命と光明とを此世に與へんがために空しく勞苦するを見たり。我儕は此問題の非常に大なることを知り又これをなすに氣力足らざるを感ずるに當りては、『神何處にありや。神は如何にして之に堪ゆることを得るか、神は何故に之を何とか爲さゞるか。』と叫ぶのみ。之に對する唯一の滿足を與ふべき答こそ、神の子の肉體を取れることゝ十字架とにてあるなれ。神は得堪えざりしなり。神は、何事をかなしたるなり。神は道德的智慧に合ふ所の此上もなき最大の事をなしたるなり。神は我儕と痛苦不幸を同うし、無限の値を以て此世を其心に取入れ自らと同じ高さになしたるなり。これ即ち最高の示現なり。勿論人生の有様は尚ほ解すべからざるものあり。痛苦の秘義はいまだ解答を得ず。然りと雖も、此の示現に對して我儕はパウロと共に言はんと欲す、何者か神の愛より我儕を離らするものあるかと。蓋し我儕のために己の子を惜まざりしところの神は、子に併て萬物をも我儕に與ふるものならざるべからず、我儕を愛するところの彼により凡ての不幸困難に勝ち得て餘りあるなり。

我儕の住む如き斯る世に於ては、神の子の降生は神の最高の示現を含むなり。余は今神の子の降生は基督教の力の大なる泉源なることを附言せんとするが、そは唯同一思想を特別に一層進めて言ふに過ぎず。

請ふ少しく之に就て說明するところあらしめよ。基督敎の所謂示現の最高の値あるは、その神の示現なるがためなり。神に關して言辭をつらねて之を述ぶることは第壹等の至要なることにあらずして、寧ろ神が人の爲に何をなし又何を考へしかを解明することが主要なるなり。神に關して言ひ且つ爲せし事は、之を言ひ且つ爲せしところの人物に由て其値を定むるなり。之をキリスト御自身に適用して考へ見ん。キリストは神に關する洞察に於てモーセ及び他の豫言者よりも遙か上に出たり、若し彼がモーセ及び他の人々の如く一個の人にてありしならんには、これぎりのことにてありしならん。即ち彼等の爲せし如く、唯言葉のみを以て神をあらはせしにて、而して神自らは自啓する程まで十分近く來らざりしと言ふを得べし。然るに、神子降生が眞實なりと假定する時は全体の意義と力とは無限に變化するを得べし。今我儕は

行爲により自啓によりて神を見るなり。神の子は神の心をあらはすため、神の人類に對する考を我儕に示すため、又我儕をして生活せしむるの道を示すため、人々の前に理想的人間生活をなせるなり。神の子は人の罪と悲みとを負ひ、死に至るまで柔順なるなり。彼は神の愛と義を知りて此世を神に償還するなり。神の子は人間界の兄弟のいと小さき者と自己を同うし、その小さき者になせしは己になせしと一樣なりと見做す。以上述べし如きは是れ基督敎の眞髓なり。されど、是等と雖も神子降生の一義を離れては何等の意味なきにあらずや。若し單にユダヤの一農夫がこれ等の語を發したるのみとすれば、それだけの事に過ぎざるべし。さり乍ら若し語れる者が生命と榮光の主にてありしとすれば、全く別義を生ぜん。若し十字架にかゝりし所の彼が前にも後にも例すくなからぬ、賤むべく耻づべき死にあひしナザレ

の善きユダヤ人に過ぎざりせば、そは單にそれだけの事なるべし。さり乍ら若し彼が神の子にして、天使の十二萬軍を呼び降すことを得れども、愛のために十字架に釘られ、自己に反對する罪人のために死せしものとすれば、そは全く別義を生ずるなり。若し我儕が大工の子なるイエスを論ずるものとせば、イエスの言ひまた行ひし力は失せて了ふならん、如何となれば力なるものは言葉及び行爲其ものに由るにあらずして、之を言ひまたは爲せしところの人物に由るものなるが故なり。無限の窮乏は無限の富有と相對する時にのみあらはれ、此の對照に於てのみ無限の愛があらはるゝなり。イエスの生命と品格とは、たゞ神の子なるものが肉體を享けしといふことに由てのみ其の重大の意見を生ずるなり。

此點に於て基督教の思想の大膽なることは、常に驚嘆の外なし。神は愛なりとの大いなる思想を思ひ切てあらはし、而してまた適當なる斷案を下せるなり。愛の神は愛の働きのほか何を働くべきか。而して愛が最も要されてある處にあらずして、夫よりもなほ慥にあらはるゝところは何處にあるべきか。而して我が人生にあらずして神の助を要すること切なるところ何處にあるべきか。基督教が莊嚴なる大膽と壯嚴なる論理とを以て、凡俗の思想にて神の在し給ふと思ふところの遠き處より神を引出し來つて、あらゆる靈魂に近く在し、あらゆる必要を聽き給ふとせる處よりも、神の助を切に要するところ何處にあるべきか。神は其の愛の働きに於て、我儕に天より雨を降し、豐かなる季候を與へ、日每の糧を與へ給ふなり。されど神の働きは之に止まらざるなり。神はまた其聖旨をあらはし給はんとて、豫言者敎法師を遣はし給へり。されど之にても未だ十分ならざりしなり。なほ一層高き

思想ありしなり。基督教は敢て、此點に就て考へんとす即ち神自らが其の無上の自啓のため、及び人の贖罪のために人間の中に來るといふことにてあるなり。而して道すでに備へられたりし時に、神の子は救世主として現はれ給へり。これ以上に何ものも加ふべきもののなきなり。これにて恩寵のなし得べきことは盡されて、此上の恩寵あることなし。神は自らの最上の示現をなし給へるなり。神は凡て愛の精神を有し、愛のために己れ自ら重荷を負ひて犠牲となりし世の志士仁人の首位に於て見られたるなり。

愛の精神を以て人を贖はんための神の働きをなすところの神なる人は基督教の信仰の中心たり又其の力の泉源たるなり。我儕の教訓よりして之を取除くときは、假令外面の形式と事實とが變らずに進行し居るとしても、その生命は失せ果つべきなり。世間の人々は基督教の信仰が執拗にも此の秘密なる教理――推理上秘義なれども愛には明白なる――に纏綿たるを怪しむと雖も、其理由は、其教理が明白に基督教的たる凡てを含むがためなりとす。神の献身的愛も、また神の倫理的完全、及び道德的偉大なることさへも、すべて此教理によりて立てるなり。最も人々の心を刺激する所のものは、いつも主イエスの謙遜と恩寵と其の十字架即ち己を棄つることなり。『是に於て神の愛われらに顯れたり、われら神を愛するに非ず、神われらを愛し、我儕の罪の爲に其子を遣して挽回の祭物とせり。』神は我儕を愛して我儕のために其身自らを與へ給へるなり。今や愛と義との示現は全うされたり。今や單に感謝のみにあらずして、更に嘆美的愛と絕對的服從とが、我儕の側に於て成立つことゝなれり。今や智能、良心、感情、意志みな一樣に神に來り、『爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成ごとく地にも成させ給へ』と

言ふことを得べし。パウロが、『我には惟われらの主イエスキリストの十字架の外に誇る所なからんことを願ふ』と絶叫せるも敢て奇むに足らざるなり。ペテロが天の使も神の此の恩寵を見んことを欲へりと言ひしも奇とするに足らざるなり。たしかに天に於ても地に於ても之より大なること、或は神々しきことはあらざるなり。かくて神の示現の力の泉源は神子降生の中にあるなり。我儕は之よりも卑き神の觀念は、永久に人の心と思を支配することを能はざるを完全に確めたり。我儕は己れ獨りの力にて斯の如き觀念に達することを得ざるべけれども、神が我儕にあらはし給へることにより、斯の如き神子降生の一義は、神に關する最高の思想上より演繹し得るところの道德的必然なることを知るに至るなり。人間の思想の中には一種奇なる論理法ありて、夫に依て神を完全なりとするか、否らざれば全く存在せざるものとして考ふるやうせらるゝなり。不完全なる神はあることなし。より高き觀念のあらはるゝや否や、我儕は之を神なる觀念の中に取り入れざるべからず、否らざれば神に於る我儕の信仰は次第に薄らぎて終には消滅し了るべければなり。我儕は比較的に善良なる神を許すこと能はず。我儕は無上完全なるものに非ざれば滿足する能はず。故に基督敎徒の有する神の思想は終に勝利を得るなり。その思想たる、神及び人に相應しき唯一のものたり。單に理論上より考ふるも、他の思想に比して考へ得べからざるものにあらず、而して人生を感動し且つ完全ならしむる點に於て全く唯一の思想たるなり。歴史は基督敎以外の思想に對する完全なる批評家なりとす。

弟子は此の神の恩寵に就て如何程考ふるも、これにて十分考へ盡せりとすることなし。これ我儕の希望と慰藉の大なる泉源なり。若し神

が我儕の主イエスキリストの父なる神以下のものたりしならば、我儕人間に對して忍び給ふといふことは到底能はざりしなるべし。我儕の最上とするところの働は貧しく、我儕の意志は弱く、我儕の愛情は頑迷なるものなるが故に己の子を賜ふことによりてあらはされたる神の無限の愛を考ふることなくば、我儕は神に於る望を有つといふことは得せざる所なり。我儕は自己及び凡て自己の働きを忘れて、上なる無限の恩寵を望み、之にのみ倚賴み、また之のみによりて立つことを得るなり。また主イエスの此の恩寵は永久不變の動機にして且つ標準なり。我儕クリスチャンたるものには、何等の法則も何等の機械的方法もまた何等の一定したる規則なるものもあることなし。斯の如きものは機械的宗敎なり。また我儕は相互の間に斯の如き規則を定むることは能はざるものなり。各人すべて十分に己の心に確信する所あり、己の良心に質す所なかるべからず、しかも尚ほ愛のみをして支配せしむるを要す。故に我儕は如何に僅かのことを爲し得るかを問はずして、如何に多くのことを爲し得るかを自問することを要す。すべての義務と犧牲と獻身とに於て我儕は常に富めるものなりしが其窮乏に由て我儕が富めるものとならんために貧者となりし主イエスキリストの恩寵を覺えんことを要す。最後に、敎會は人の心を獲んがためには此恩寵を說くことに由らざるべからず。キリストの十字架は人を引寄するものなり。キリストの十字架は人をして自己を悟らしむるところのものなり。世の中の罪惡はキリストの十字架のあらはれによりてのみ明瞭なる意識となるものなり。此の記號に由て汝は勝利を得んとのコンスタンティーンの夢想は、基督敎會に向つても亦た眞理を含めるものとす。さても我儕は此敎理の道德的必要と宗敎的價値とを考へたり。我

儕は更に何を言はんか。たゞ我儕が我主の驚くべき恩寵を一層深く了解し、また之に對する我儕の愛の責任を悟るに至らしめ給はんことを祈らんのみ。勿論我儕は主イエスの恩寵を完全に悟り得んことは能はざるべし、之を完全に悟り得るは唯神のみ。

彼が失はれたる其羊を見出すまでに、
主が通り越し給へる夜は如何に暗かりしか、
また渡り越へし水の如所に深かりしかは、
贖はれたるもの丶唯一人だも知るなし。

しかし、我儕の不完全なる悟りを以てしても、此の大切なる教に對して、痛ましく悲しきほど我が眼は暗く、我が心の不思議なるほど冷淡なるは明かなり。天の光りに由て我儕がはじめて主イエスの恩寵と之に對する我儕の私慾心の强かりしことを比較して、慚死し了らざるやう、神その恩寵を以て我儕の心を開き且つ明かになし給はんことを、

アーメン。

明治卅九年八月六日印刷
明治卅九年八月九日發行

（定價金五錢）

譯者　須藤鬼一
東京市京橋區銀座四丁目一番地

發行者　堀田達治
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷者　ゼー、エル、カウエン
東京市京橋區銀座四丁目一番地

發行所　敎文館
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所　敎文館印刷所

B-85

9
0

神子降生

ビー・ピー・バウン

国立国会図書館

特
2

020802-000-8

特49-230

神子降生（インカルネーション）

ビーピー．バウン／著

M39

ABI-0628